

河村貞枝著

### 『イギリス近代フェミニズム 運動の歴史像』

評者：安川 悦子

本書は、19世紀中ごろから20世紀はじめにかけての、イギリス中流階級の女性たちのフェミニズム運動を主題にしている。日本におけるイギリス女性史研究の第一人者である著者の長年にわたる研究成果がここに収録されている。1980年代後半のジェンダー史観の登場以来女性史研究は、方法においても対象においても大きく変化した。ジェンダー史観の登場以前からイギリス女性史研究に取り組んできた著者は、この女性史研究の大転回をどのように受け止めたのだろうか。本書の書評を引き受けた理由は、こうした私の関心にあった。

本書は、三つの主題にわけられている。「ヴィクトリア時代のフェミニズム」と題する第1部は、本書の中心テーマであり、著者の問題意識がもっとも明白に提示されている論文が収録されている。ヴィクトリア時代の中流階級の女性にとって唯一の職業であったといつてよいガヴァネス、つまり「住み込み女家庭教師」をキーワードにして、イギリスにおけるフェミニズム運動の成立が析出されている。結婚しなかった（あるいはできなかった）ため夫の扶養に依

存できない困窮した中流階級の女性（ジェントルウーマン）の生活問題がヴィクトリア中期には深刻になっていた。この困窮したジェントルウーマン（しばしば「余分の女性」と揶揄された）が、経済的自立のために職業をもとめ、その唯一の職業がガヴァネスであった。イギリスのフェミニズムは、こうしたガヴァネスという職につき、ガヴァネス職の安定を求めるジェントルウーマンたちが現実的な推進力となったというのである。

このガヴァネスが実際にどのような状況におかれていたかを分析した第1章「イギリス・フェミニズムの背景 - ヴィクトリア期ガヴァネスの問題」につづいて、第2章では、こうしたジェントルウーマンたちの現実的な要求 職業の拡大と保障、職業のための教育改革 をかかげた運動団体や、ロンドンのランガム・ストリートに本拠をおいた「ランガム・プレイス・サークル」と呼ばれる女性たちの活躍が取り上げられている。1858年にバーバラ・リー・スミス（のちに結婚してポディションとなる）やベッシー・レイナー・パークスらによって創刊された『イングリッシュ・ウーマンズ・ジャーナル』、1866年にそれをひきついで形で、ジェッシー・プーシェレットによって創刊された『イングリッシュ・ウーマンズ・レビュー』（1910年までの刊行）の二つの女性雑誌の分析を通じて、ヴィクトリア時代のジェントルウーマンの担ったフェミニズム像があきらかにされている。この二つの雑誌において一貫して主張されたテーマは、女性の職業の拡大とそのための女子教育の充実であり、また既婚女性の財産権や「婦人参政権」といった法的な女性の人権の確立についてであった。これにつけ加えて、これ

らの雑誌では、女性の博愛主義的な慈善活動が説かれている。これは、経済的に困窮しているジェントルウーマンに職業の確保が必要であったとすれば、夫に扶養されて経済的に心配のないジェントルウーマンには、キリスト教の精神に依拠した博愛主義活動が必要であったということの意味する。ジェントルウーマンにふさわしい職業の確保と博愛主義活動とが一つのセットになっていたことが、この二つの女性雑誌の分析から明らかにされている。

第2の主題は、「イギリス婦人参政権運動の展開」と題されている第2部で扱われている。19世紀末から1910年代にむけて、センセーショナルに、あるいは粘り強く運動を展開した二つの女性参政権運動団体の歴史的な経緯を扱った論文がここに収録されている。マンチェスターから始まったパンクハースト母娘が指導した戦闘的な「女性社会政治同盟」(WSPU)と、フォーセット夫人が中心の、穏健な運動を展開した「婦人参政権協会全国同盟」(NUWSS)の歴史とその運動が、4章を費やして分析されている。第1章では、イギリス女性参政権運動の歴史とその文脈において、戦闘的な運動を展開した「女性社会政治同盟」はやはり異端であったとする立場から、この「女性社会政治同盟」の全体像が描き出され、第2章から第4章では穏健な運動を展開した「婦人参政権協会全国同盟」の歴史的推移が描かれている。著者は、1918年の女性参政権の成立への道を切り開いたのは、この穏健な団体によるところが大きく、19世紀半ばぐらいのジェントルウーマンが切り開いたイギリス・フェミニズムの成果であったと結論している。

第3の主題は、「ヴィクトリア時代の家庭と女性 - フェミニズムの周辺」というタイトルからもわかるように、ジェントルウーマンの生息している家族の実態についてであった。中流階

級の「家庭」は、厳格な性別役割分業を体現する場であった。家屋の構造や間取りにおいても、夫と妻と子どもと、そして家事使用人の生活領域が明確に区別されていたことを著者はここで明らかにしている。また中流階級の家族は、厳格な性別役割分業意識を再生産する場であった。とりわけ女の子にとっては「社会化」の場として重要な意味をもち、「家庭」は、母親や家庭教師をとおして、ジェントルウーマンのリスペクタビリティを身につける場であったという。

ジェントルウーマンのリスペクタビリティとは何か。第3部、第1章の「ヴィクトリア後期およびエドワード期の家族史の一考察 - 中流階級の女子教育をめぐって」は、本書の中でもっとも興味深い論文であるが、ここでこの問題が分析されている。中流階級の「家庭」において、妻は、もっぱら子どもを産むことのみが求められ、職業労働からも家事労働からも排除され、「遊惰」と「無為」の世界に生きることが強制されていた。レオノーア・ダヴィドフやジェーン・ルイスらイギリスのジェンダー史研究者の成果をふまえて著者は、ジェントルウーマンの置かれた状況を具体的に描き出している。「第2章イギリスにおける家事労働の機械化と『女性の解放』」で明らかにされているように、家事労働の機械化がアメリカにくらべて相対的に遅れたのも、これらジェントルウーマンが全体として家事労働から疎外されていたことと関係がある。家事使用人が本格的に不足した時はじめてイギリスでは機械化がすすめられたというのである。

ジェントルウーマンの生活規範は、一切の仕事をもたず「遊惰」と「無為」に過ごすことであった。19世紀末、すでにアメリカの経済学者ヴェブレンが指摘したように、中流階級の妻は、夫の経済力を誇示するアクセサリーであった。

妻は、贅沢な消費をすることが強制された。「無為」と「遊惰」が生活のすべてを規制するとはどういうことなのかについては、この時代からおよそ半世紀のちの、現代フェミニズム運動のきっかけを作ったアメリカのベティー・フリーダが『女性の神話』(1963年)においてつづさに説明している。「無為」と「遊惰」にひたるアメリカの中流階級の専業主婦は、「強制収容所」でひたすらガス室に送られるのをまつゴダヤ人と同じであるというのである。ジェントルウーマンがこうした状況から脱却する唯一の手がかりは、キリスト教にもとづく博愛主義活動であったと著者は説明している。

本書に収録されたもっとも古い論文は1974年に発表されたガヴァネスを扱った論文であった。それから数えると30年近くの著者の研究成果がここに凝縮されている。論文の書かれた年代によって、またジェンダー史観が登場する以前と以後とでは、著者の研究の視点や文体に若干の変化があるとはいえ、女性参政権運動を支え、それを実現したイギリス・フェミニズムにたいする著者の思い入れは一貫している。中流階級のジェントルウーマンが展開するフェミニズムが、女性の地位や権利の向上に大きな力を発揮した。このことへの著者のポジティブな評価とともに、本書をとおして伝わってくる著者の一貫した、しかし禁欲的で抑制的な研究態度は敬服にあたいする。とかく忘れがちな歴史研究者としての凜とした姿勢をそこに読み取るからである。

しかし禁欲だけが歴史研究者のモラルではない。対象にもう一步踏み込んで、現代という時代を切り裂く問題を歴史研究からつかみ出すことも必要である。著者はこの点においてあまりにも謙虚である。例えば、困窮したジェントルウーマンのガヴァネスの自己撞着についてもう少し踏み込んだ分析があってもよかった。ジェ

ントルウーマンのリスペクタビリティを身につけた女性が、このリスペクタビリティを売り物にして、ガヴァネスという職業を手に入れる。これは実は自らのリスペクタビリティを放棄することを意味した。ジェントルウーマンのリスペクタビリティをめぐるこの「矛盾」を、彼女たちはどう考えていたのであろうか。問題をもっと拡大していえば、長い間、近代フェミニズムにとってアポリアであった「職業」と「家族」についての「矛盾」を、ガヴァネスはどのように考えていたのであろうか。史料の制約もあるかもしれないが、著者はこの問題を不問にしている。著者の関心は、ここのところになかったと思われる。

「無為」や「遊惰」に反発して博愛主義運動に参加したジェントルウーマンたちは、ガヴァネスのような「矛盾」の中におかれていたわけではないが、問題は同じであった。彼女たちは、ジェントルウーマンの「無為」「遊惰」にたいして反発したが、「家族的価値」や「母性」を否定したわけではなかった。むしろこれをよりどころにして自らのフェミニズムを作り上げていた。ジェントルウーマンのフェミニストたちは、「家族的価値」や「母性」をポジティブなものとして認めていたと著者も指摘している。このジェントルウーマンの認める「母性」こそが、労働者階級への博愛主義的な働きかけの推進力となり植民地インドの女性への関心の根拠となったというのである。

ジェンダー史観の問題提起をうけて、著者はイギリス帝国の文脈の中でフェミニズムを捉えなおすという作業をしている。第1部、第3章の「19世紀後期から20世紀初頭にかけてのイギリス・フェミニズムと帝国主義」と題する論文(1998年に発表)がそれである。この作業において、著者が扱ってきたジェントルウーマンたちはすべて、ラディカルな運動を展開したパン

クハーストを含めて、帝国主義的視座から自由ではなかったことを明らかにしている。彼女らは総じて、アイルランド自治に反対し、ボーア戦争に賛成し、第1次世界大戦の大義を積極的に支持した。フェミニストたちは積極的に戦争遂行に協力したという。

なぜこうしたことになったか。著者はこの問題について、フェミニズムも、「権利のための闘いであると同時に、権力・権限（パワー）の要求でもあったし、今後もそうであろう。19世紀のフェミニストは、教育、選挙権、福祉立法などさまざまな手段によって、権力が与えられることを追求した。そして、そのうちの少なからずのものが、フェミニズムの『大義』をイギリスの帝国支配と提携することによって追求されたのである。」（100 - 101ページ）と説明しているだけである。イギリス・フェミニズムの帝国主義志向は、フェミニズムの大義実現の手段であったと説明するだけでは、何も説明したことにならない。問題は、これらジェントルウーマンのフェミニズム思想の構造にあった。歴史のもう少し大きな文脈の中で考えてみると、問題の所在がもっとはっきりしてくる。

19世紀末から20世紀はじめにかけて、イギリスでは中流階級だけでなく、労働者階級も「家族的価値」にとらわれていた。男性労働者は家族を養える賃金の獲得にこだわったし、国家は、こうした「男性一人パンの稼ぎ手型家族」の維持、形成にこだわってきた。20世紀はじめに形

をととのえるイギリスの福祉国家システムは、こうした「家族」の形成、維持の問題と密接に関係していたのである。国内の労働者階級への福祉をまもるといのが、戦争の理由とされた。ジェントルウーマンのフェミニストだけでなく、イギリス労働階級のラディカルな指導者たちも、この福祉国家＝帝国主義思想にからめとられていた。ボーア戦争を支持し、第1次世界大戦へのイギリスの参戦を積極的に支持したのは、これらフェミニストたちだけではなかったのである。彼らはどちらも「家族的価値」をリスpekタビリティのよりどころとしていた。この「家族的価値」は容易に国民国家のリスpekタビリティと結びつく。いま問われているのは、この構造をどう解体するかなのである。

イギリスの近代フェミニズム運動についての長年にわたる著者の仕事の意味は大きくて重い。そうであるからこそ、なぜ近代イギリス・フェミニズムが帝国主義に親和的であったかという問いに著者は答える必要があるのではないか。現代フェミニズム（ジェンダー史観といいかえてもよい）が到達した思想的成果をふまえて、この問題を考える必要がある。このことは著者だけでなく私自身の課題でもあるのだが。

（河村貞枝著『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書店、2000年3月刊、300頁、定価3,900円+税）

（やすかわ・えつこ 福山市立女子短期大学学長）